第四講　演習問題(4)

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

そのころ、吉野の山に籠り給へる優婆塞（うばそく）の致仕（ちじ）の大臣（おとど）おはす。故入道大臣の御はらから、今の左大臣殿よりはこのかみにおはす。故入道大臣の御後は、世の御後見し給ふべかりけるを、今の殿にゆづりきこえ給ひけるゆゑに、世を怨みて籠り給へる（イ）なり。今は七十路（ななそぢ）に及び給ふまで御髪（みぐし）の雪は変はらず、世に経る方かしこく、財の山を御垣のうちに築き置き給ひて、世人もその方をめでたてまつるに、姫君三人おはするを引き続きて、この三月のころ、かしこの花のさかりを見捨てて都に帰り給へるが、関白殿へ、

　身の憂きに吉野の山に入りしかど思ひ残らず帰り来にけり

殿いとあはれにめづらしう思しつつ、

　世を憂しと入りにし山を帰りなばやがて［　A　］なるべし

この人世を怨むる心深くてかく行なひ過ぐす事、亡き御ためも、わが御末々も、よからぬ事[ロ]なりと思して、帝にも奏し申し給ひて、[1]しばしがほどにても名をかけさせんと思し寄る。

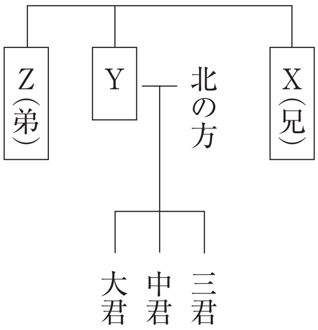
この殿へわたり給へり。中納言中将・三位中将・大将はさら[ハ]なり、みな集ひ給へる御中に、まことに御鬢(びん)のあたり・御髭(ひげ)、みな白妙(しろたへ)に雪をふくみて、神さびたるものから、さすがによしありらうらうじくて、目尻ぞ少し癖々しからんと見え給ふ。まづ住み来し山の有様、雪の深さ、この十六年がほど行なひつる有様、「真言の秘密残らず、灌頂(くわんぢやう)も三度つかまつりて」など、人には物も言はせず、息苦しげに引きつつのたまふさま、[2]をこびたり。からうじて隙ある折、御慶びのよし仄(ほの)めかしのたまひ出でたるに、思し喜びたるさま、いみじう[3]あはれなり。

もと住み給ひし七条堀川を、上らんの御心つきけるにや、去年の秋ごろより磨きつくろひたるに、住み給ふ。ほどなく右大臣に返り[ニ]なり給ひて、関白の宣旨(せんじ)あり。御慶び申し給ふも、大臣とりもちて沙汰しきこえ給ふを、世の人いみじく感じたてまつる。[4]雲の上にては、臆し給へりけるにや、さのみ御口もえきかず、拝したてまつり給ふほどの苦しげさを、若き内侍どもはほほゑみけり。上御対面ありて、あはれと御覧ず。明王の時待ちて出でける商山の四皓などはかくやありけんと

見えたる御さまホなり。

（『恋路ゆかしき大将』による）

問一　左の系図の空欄 X（兄）・Y・Z（弟） にあてはまる人物の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選べ。



イ	X　今の左大臣	Y　故入道大臣	Z　致仕の大臣
ロ	X　故入道大臣	Y　今の左大臣	Z　致仕の大臣
ハ	X　今の左大臣	Y　致仕の大臣	Z　故入道大臣
ニ	X　致仕の大臣	Y　今の左大臣	Z　故入道大臣
ホ	X　故入道大臣	Y　致仕の大臣	Z　今の左大臣
ヘ	X　致仕の大臣	Y　故入道大臣	Z　今の左大臣

問二　誰が、なぜ、山にこもったのか。誰がにあたる人物として最も適切なもの（①）と、なぜにあたる理由として最も適切なもの（②）を、それぞれ次の中から一つ選べ。

①　人物

イ　致仕の大臣　　ロ　故入道大臣　　ハ　今の左大臣

ニ　中納言中将　　ホ　三位中将

②　理由

イ　年取ってから生まれた姫君三人の世話をするため。

ロ　七十歳になり、仏道への思いが募ったから。

ハ　故入道大臣が地位を今の左大臣に譲ったから。

ニ　財宝も貯まり、特に欲もなくなったから。

ホ　妻が亡くなり、世の中を憂きものと思ったから。

問三　空欄 A に入る語句として最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　たのしき悟り

ロ　苦しき道と

ハ　きびしき吉野

ニ　怨むる時と

ホ　うれしき栄え

問四　傍線部１「しばしがほどにても名をかけさせん」の内容として最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　しばらくの間だけでも、姫君三人の世話をしよう。
ロ　しばらくの間だけでも、仏道修行をさせよう。
ハ　しばらくの間だけでも、都を楽しませよう。
ニ　しばらくの間だけでも、関白にさせよう。
ホ　しばらくの間だけでも、よい若者を集めよう。

問五　傍線部２「をこびたり」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　苦しげである。
ロ　滑稽である。
ハ　神さびている。
ニ　すばらしい様である。
ホ　ふざけている。

問六　傍線部３「あはれなり」の「なり」と文法的に同じ「なり」を、問題文の波線部イ〜ホから一つ選べ。

問七　傍線部４「雲の上にては、臆し給へりけるにや、さのみ御口もえきかず」の内容として最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　致仕の大臣は、関白になったものの、緊張するのか、さほど口もきけない。
ロ　故入道大臣は、関白になったばかりのとき、気後れしてしまい、さほど口もきかなかった。
ハ　今の左大臣は、関白になったので、周囲は臆してしまったのか、さほど口もきかない。
ニ　大将は、若くして関白になったので、緊張して、さほど口もきけない。
ホ　若き内侍どもは、宮中では気後れしてしまい、さほど口もきけない。

第四講

〈模範解答〉

問一 ホ　**問二** ①イ　②ハ　**問三** ホ

問四 ニ　**問五** ロ　**問六** ハ　**問七** イ

〈現代語訳〉

その頃、吉野の山に籠もりなさっている優婆塞〔＝俗世にいるまま出家した男〕の致仕の〔＝退任した〕大臣がいらっしゃる。故入道大臣の御兄弟で、今の左大臣殿よりは年上でいらっしゃる。故入道大臣の御退任後は、（致仕の大臣が）世の御後見〔＝関白〕をしなさるはずだったが、（故入道大臣が）今の左大臣殿に譲り申し上げなさったために、世を恨んで籠もりなさったのである。もう七十歳に及びなさるまで御髪の白髪は変わらず、世間で生きていく方面のことは巧妙で、財産の山を垣根の中に積み置きなさって、世間の人もそうした方面のことを褒め申し上げるが、姫君が三人いらっしゃるのを引き連れて、この三月の頃に、吉野の花の盛りを見捨てて都に帰りなさったが、関白殿〔＝今の左大臣殿〕へ、

身の憂きに……＝我が身のつらさに吉野の山に入ったが、（つらい）思いは（今はもう）残っておらず帰ってきたよ

左大臣殿がたいそうしみじみと嬉しく思いなさって、

世を憂しと……＝世をつらいと入った山を帰ってきたのならば、すぐに喜ばしい繁栄があることでしょう

（左大臣殿は）この人〔＝致仕の大臣〕が世を恨む心が深くてこのように仏道修行をして過ごすことは、亡くなった入道大臣にとっても、ご自身の子孫にも、よくないことであると思いなさって、帝にも申し上げなさって、しばらくの間だけでも、関白にさせようと思いつきなさる。

（致仕の大臣が）この殿〔＝左大臣殿〕の邸へいらっしゃった。中納言中将・三位中将・大将はもちろんのこと、みなが集まりなさっている御中に、本当に御鬢のあたり・御髭が、全部白く白髪を含んでいて、老け込んでいるが、そうはいってもや

はり奥ゆかしく洗練されていて、目尻が少し癖がありそうに見えなさる。まず住んでいた（吉野の）山の様子、雪の深さ、この十六年の間仏道修行をした様子を、「真言の秘密は残らず、灌頂も三回お受けいたしまして」など、人には何も言わせず、息苦しそうにしながらおっしゃる様子が、滑稽である。やっとのことでは話が途切れた時に、（左大臣殿が）お祝いの旨をそれとなくおっしゃったところ、心から喜んでいる様子が、とてもしみじみとしている。

もともと住みなさっていた七条堀川を、上京しようという心が起こったからであろうか、去年の秋頃から美しく飾り立てていたのだが、（そこに）住みなさる。まもなく右大臣に再びなりなさって、関白の宣旨がある。お礼を申し上げなさるのも、左大臣殿がかかりきりで手配し申し上げなさるのを、世間の人がとても感動し申し上げる。（致仕の大臣は）宮中では、緊張なさるのであろうか、さほど御口をきくことができず、拝舞の礼を舞い申し上げなさるときの苦しそうな様子を、若い女房達は微笑んで（見て）いた。帝が御対面なさって、しみじみと御覧なさる。明王が時を待って現れた商山の四皓などはこのようであっただろうかと思えたご様子である。